

長崎史談会・平成26年度秋季研修旅行  
京都方面史跡めぐり(9月2日～4日)No.2

本会名誉会長 宮川雅一

一六、日光に先立ち建てる東照宮家康・山王・秀吉  
祀る

急な坂段を上って東照宮へ。神職が居られて内陣に入って参拝でき、日光に先立ち天台僧天海が創建し、家康(東照大権現)のほか山王権現や豊臣秀吉も祀るといった話を聞く。

一七、西塔の浄土院から釈迦堂へ霧雨のなか最澄  
(さいちょう)偲ぶ

霧雨のなかバスで比叡山延暦寺へ向かう。最初に西塔地域の釈迦堂から伝教大師(最澄)の御廟である浄土院(阿弥陀堂)に参拝する。

一八、東塔の根本中堂不滅の燈(ひ)黒光りする大柱  
(おおはしら)の陰

東塔地域にある根本中堂が総本堂。大きなお堂の奥深く不滅の法灯が3基灯っていた。

一九、小雨降る比叡下れば大谷の群れなす墓石(ぼせき)夕陽に映ゆる

雨は山の上だけで下界は晴、親鸞聖人眠る大谷本廟あたりに来るとその周辺に林立する墓石が夕陽に映えていた。今日の宿は京都の中心部にあるギンモンドホテル。

二〇、「南禅寺ぎんもんど」なる料亭はかがり火に  
あうしもたや造り

夕食にホテルが経営する南禅寺門前にある料亭へタクシーで道幅の狭い通りを走って行く。しもたや造りの奥まった部屋に、かがり火が焚かれる庭を通して案内される。

二一、珍しく給仕ひとりが男衆はかま姿で  
身についた所作

給仕をする人たちのなかに、はかまを付けた若い男性が一人いて、さすが京都と感じた。

二二、朝食に和食選びて待つ間にも今日の行動  
作戦を練る

午前6時起床。地下の和室で朝食を取る。今日は、幾組にも別れ、行く先も別々に分かれる複雑な団体行動になるので、幹事さん方が慌しく走り回っておられる。

二三、タクシーに仲間三人相乗りし 京都(みやこ)の  
北東修学院へ

今日訪ねる修学院離宮と桂離宮は、京都の極端に北東と南西に離れている。行動を共にする各3人で1台のタクシーに乗ってまず修学院離宮を目指す。

二四、狭き路すり抜けて着く修学院 若き学生開門  
を待つ

運転手に名所案内を受けつつ進むが、修学院離宮近くなると道路が極端に狭くなった。入口に4人の男子大学生。女子学生一行が小型バスで到着する頃、警備員が手招きする。

二五、許可証をあらためてのち警備員和風造りの  
待合所指す

許可証と保険証を警備員に見せ、和風造りの待合所へ。待つほどに、六十歳代の背の高いガイドが現れ、今から出発するというと、20数人の様々な年代の参観者が集合する。

そのなかには幼児を連れた西洋人の夫婦もいた。

二六、まずぐる御幸門(みゆきもん)を前にして  
ガイドは語る「ここに庭なし」

御幸門を前にガイドが開口一番「ここは庭園ではありません」。確かに冊子を見ても大きな池と自然林が目立ち、人工的な庭園はわずかである。そのかなり離れた上・中・下3つの御茶屋(離宮)を順次案内するとのこと。

二七、いふなればここは宮家の行楽地自然のなかの  
仮の宿り場

ここは後水尾上皇の雄大な構想になる山荘、つまり自然を最大限大事にして、そのなかで人間が簡素な生活を楽しむという哲学で造られており、3箇所の離宮間に展開する水田畑地を買い上げて、景観保持に万全を期しているという。

二八、下御茶屋「寿月観」には三間(みま)があり  
一の間広く上段を持つ

ここは、上皇行幸の際、御座所に当てられたため、生活のしやすいつくりとなっている。

二九、「楽只軒(らくしけん)」内親王の元御殿技巧  
凝らさず趣(おもむき)に満つ

中御茶屋は上皇の第八皇女朱宮光子内親王のために造営された楽只軒、東福門院の女院御所の客殿、朱宮開山の林丘寺からなり、明治になって離宮の編入された。

三〇、楽只軒高みに連なる客殿に天下に名高き  
「霞棚」見ゆ

「天下の三棚」というのはこの「霞棚」、桂離宮の「桂棚」、三宝院にある「醍醐棚」をいう。

確かに互い違いに配された大小五枚の棚板がいかに霞がたなびいているように見える。(続く)



修学院離宮、中離宮・客殿一の間にある違い棚。